

アーティスト・イン・レジデンス事業
人材育成キャンプ & フォーラム アジア

AIR CAMP 2017



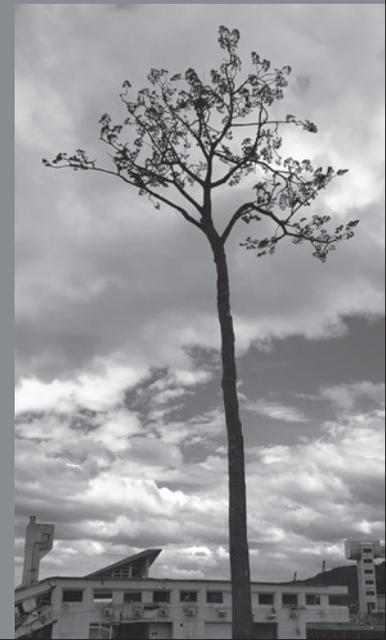
in

陸前高田

生活と

創造

2017 記録集



npo S-AIR



陸前高田音頭

1. 春 - Haru

波が はやせば 鷗が謡う 「サテ」
椿島さえ 霞でとけて
出船入船 ひとおどり
ホンニ陸前高田の春は
眺め千両の 花絵巻
来やっせ 寄らっせ マタオイデ
高田ヨイトコ ミナオイデ

2. 夏 - Natsu

キャンプ灯りか 松原ゆけば
若いかがり火 ほのぼの燃えて
松の小枝も 差し招く
ホンニ陸前高田の夏は
遠い昔も よみがえる

3. 秋 - Aki

みのある稲穂に 宝の黄金
うつる鳴瀬の 虹呼ぶ川に
濡れてうれしい 糸娘
ホンニ陸前高田の秋は
月もほほえむ 夢心地

4. 冬 - Fuyu

つもる粉雪も 情でとかす
氷の上山から 竹駒かけて
寒さ知らずの 風が吹く
ホンニ陸前高田の冬は
浮世忘れる 楽天地



「生活と創造」に還ってみて～AIR CAMP 2017より～

柴田 尚
特定非営利活動法人S-AIR 代表

3年目となる本年は、今までS-AIRの拠点としていた地元札幌を飛び出し、初めて他の地域、陸前高田にある箱根山テラスを拠点に二泊三日で行われた。なお、この企画は、S-AIRと陸前高田AIRという別々の地域にある二つのAIR組織によるコラボレーション企画である。

AIR CAMPの特徴は合宿スタイルにあり、これは、もともと「小さなアーティスト・イン・レジデンス(以下AIR)体験」を意味している。本事業の一つ目の目的は、日頃アーティストのホスト側として関わっているAIR運営スタッフが、ホストされる側になるという役割転換の試みである。実はAIRを運営するスタッフは、いろんなAIR施設を周っているアーティストに比べると、AIR体験が少なく、偏っていると感じていたからだ。

実は私自身も、1999年にS-AIRを始めた当初、AIRのことをほとんど知らなかった。その後、受け入れた作家たちの招きで、オランダ、ロッテルダムにあるDUENDE(元工科大学の建物をスクワットングー不法占拠し、47室以上の巨大なアトリエがある)等の施設を案内してもらった。2003年には自らがレジデントとして1か月間滞在することになったが、このとき自らがホストされる側になり、そのときに受けたホスピタリティや組織の運営方法などに、いろいろと学ぶ点があったのだ。

そして、本事業のもう一つの目的は、「他のプログラムや地域を学ぶこと」である。

AIRは地域と関連が深い事業である。昨年度までは地元である札幌で2年間開催していたのだが、スタート時より、このプログラムを他の地域でも開催すべきと言い続けてきた。地域の特性や課題、そして対処法も、実際にその土地に行かないとなかなか見えづらいからだ。

今年の会場となった陸前高田市は、2011年の震災で大きく傷ついてしまった土地である。現場で、山を崩し、盛り土をするために土地から作っている工事風景を見て、改めて原点に還った。AIRの最大の目的は、作品の創造や作家の育成とともに、それを生み出すための環境づくりにあるのではないかと。

「生活と創造」

アーティスト・イン・レジデンスの根本は、ここにあるのではないかと。陸前高田は、「生活自体を創造している」。そう感じたからだ。

全て失ったところから生活を始め、出版や演奏など独自の方法で自己表現されている「佐藤たね屋の佐藤貞一さん」、震災前と変わらずに永く続く伝統芸能を見せてくれた「柿内沢鹿踊保存会」の皆さんには、特に感銘を受けた。「生活と創造」に関わる活動をしているのは別にアーティストだけではなく、それは普遍的なテーマであり、「そこに暮らす人」自体が地域資源であることを強く感じた。

故郷である陸前高田と自らの作品制作活動との関わりをお話してくれた畠山直哉さんをはじめ、国内外の大変興味深い事例を語ってくれた杉原信幸さん、アレック・ステッドマンさん、ウバトサットさん、ヌル・アクバル・アロファトゥラさん、ショーネッド・ヒューズさんら講師の方々に、改めて感謝を述べたい。

今回の事業は、交流のある陸前高田AIRの協力を得て、初めて他の地域で開催できた。コーディネートをしてくださった日沼禎子さんと、全く土地の知識がないS-AIRに地域の魅力を紹介してくださった松山隼さんがいなければ、実現できなかった。深くお礼を述べたい。

Going back to the basics: “Everyday Life & Creation”

Hisashi Shibata
Director of NPO S-AIR

This year's third annual AIR CAMP was held at Hakoneyama Terrace, Rikuzentakata city in Iwate Prefecture, in the northeast of mainland Japan over the course of two nights and three days. For the first time, away from the familiar environment of Sapporo City where the NPO S-AIR is based, the program was coordinated through a collaboration between S-AIR and Rikuzentakata AIR, located in two different areas of Japan.

One of the characteristics of AIR CAMP is that it is essentially a workshop, which is like a small version of artist-in-residency program. The purpose of it is that the organizers, who are usually the hosts, get the experience of being hosted as a guest resident. Compared to artists, who always have chances to take part in residencies, coordinators and organizers rarely have the experience of participating in a residency.

When I started S-AIR in 1999, I had little knowledge about residency organizations. Some years later, I had a chance to visit an artist who had previously participated in the S-AIR program. It was an independent, self-organized artist-cooperative called DUENDE in Rotterdam, The Netherlands. It was a squat, and had more than forty-two large studios in a former institute of technology. Then for a month in 2003, I stayed as a resident, as a guest, and learned several important aspects about hospitality, programming and organization of residencies. For that reason, to be an organizer, it is quite important to know the perspectives of artists.

Another intention of this program is to learn about the diversity of residency organizations and their home bases because residency projects are deeply linked to their communities. For the past two years, AIR CAMP took place in Sapporo where S-AIR is based, however choosing another host location was urgent because of variations in local characteristics, problems and their

solutions. People often recognize these realities only after being physically exposed to the site.

Rikuzentakata city has a huge scar from the 2011 Tōhoku earthquake and tsunami disaster. There, I saw the construction site where efforts were underway to take away soil from nearby mountains and create a new base for the land by using these soils. Looking at the site evoked us to go back to the basics. The main purpose of residency is not just about supporting the creativity of artists, but to establish a stable foundation, the environment for us to educate artists, and artists to produce their works.

“Everyday Life & Creation”

This could be the fundamental principle of residency. I truly felt that after seeing Rikuzentakata City where they are rebuilding their lives at this moment.

I was especially impressed by the people: Teiichi Sato from Sato Seed Store who self-publishes books and performs music; dancers of Gyozanryu-Yamaguchiha-Kakinaizawa Deer Dance Preservation Society, who performed traditional performance art which was in their spirits even after the disaster. Artists are not the only ones who works around the theme of “Everyday Life & Creation”, but it is indeed a universal theme, and particularly for those who live in this place requires them to approach life with some creativity. In that sense, I strongly felt that they are genuinely the local resources.

I would like to show my gratitude to all the lecturers: Naoya Hatakeyama, who is originally from Rikuzentakata city, for sharing his thoughts about the relationship between his works and his hometown as well as Nobuyuki Sugihara, Alec Steadman, Ubatsat, Nur Akbar Arofattullah and Sioned Huws for introducing such interesting projects in Japan and abroad.

Also, this project was realized for the first time outside of Sapporo in partnership with Rikuzentakata AIR. I would like to thank Teiko Hinuma, who coordinated this program, as well as Jun Matsuyama, who guided us to the beauty of Rikuzentakata City and its surroundings, as we have no knowledge about the area. Without their support, this program would not have been possible.

講師プロフィール



ウバトサット

Ubatsat

アーティスト、アクティビスト、
The Land Foundation メンバー (タイ)

1980年タイ、バンコク生まれ。タイのアーティスト、アクティヴィスト、またキュレーションも行う。The Land Foundationのメンバー。ウバトサットのアートに対する考えは、彼自身を取り巻く関係性や、生活そのものを理解するために機能している。その主な手法は、一度は破局を体験した人々と集団で協働することによって、社会文化的変化を促進し、理解を深め、協働でのクリエイション意識を共有する活動を行うことである。彼の作品と活動は個としての捉えではなく、集団の中で個性を特定付けられる「中間的」なアーティストの存在として、理解することができる。従来とは違った考え方や実践によって、アートをコミュニティまたは生活の中に浸透させる、発想豊かで遊びに戯れるようなアーティストである。

The Land Foundation

1998年、2人のタイ人アーティストKamin LertchaiprasertとRirkrit Tiravanijaが、チェンマイ郊外の休耕田を拠点に開始した、新しい土地活用のプロジェクトを前身としている。2002年には同地にアートセンターが建てられた。現在のThe Land Foundationは2004年に設立。The Land Foundationは人間社会の関わり場として、対話と情報共有に視点を置いた芸術文化、持続可能な農業、瞑想による自己啓発活動などを展開している。これまで実験的なコミュニティ形成のプロジェクトを行っており、そのモデルは海外でも参考にされている。



畠山直哉

Naoya Hatakeyama

写真家 (東京都)

1958年岩手県陸前高田市生まれ。筑波大学芸術専門学群にて大辻清司に師事。1984年に同大学院芸術研究科修士課程修了。以降東京を拠点に活動を行い、自然・都市・写真のかかわりに主眼をおいた、一連の作品を制作。国内外の数々の個展・グループ展に参加。作品は以下などのパブリック・コレクションに多数収蔵されている。

国立国際美術館 (大阪)、東京国立近代美術館、東京都写真美術館、ヒューストン美術館、イェール大学アートギャラリー (ニューヘブレン)、スイス写真財団 (ヴィンタートゥーア)、ヨーロッパ写真館 (パリ)、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館 (ロンドン)



アレック・ステッドマン

Alec Steadman

Cemeti – Institute for Art and Society
共同チーフキュレーター (インドネシア)

キュレーター、リサーチャー。設立者であるNindityoとMellaが、設立30年を期に一線を退き、Cemeti – Institute for Art and Societyの共同キュレーターとなる。2016年まで、イギリスのアーツ・カタリストにてキュレーターを務めた。それ以前の活動として、香港のアジア・アート・アーカイブ (AAA) にてエキシビション・スタディー・リサーチ・フェロー (2015)、エジプトのコンテンポラリー・イメージ・コレクティブにてアーティストティック・ディレクター (2013)、イタリアのサンドレット・レ・レバウデンゴ財団現代美術館にてキュレーター・イン・レジデンス (2013)、オランダのデ・アペル・キュレトリアル・プログラム (2011-12) 等がある。

Cemeti – Institute for Art and Society

1988年設立のインドネシアで最も古い現代アートのプラットフォーム。「Cemeti Gallery」「Cemeti Art House」と変遷した後、30周年を迎える2017年、「Cemeti – Institute for Art and Society」として新たなチームに引き継がれた。年間プログラムは展覧会、ワークショップ、Cemetiを公共に開かれたものとして再調整・想起させるための「メンテナンス・ワーク」と呼ばれる集まりで構成。2018年2月以降には、地元や海外のアーティスト、研究者との長期的なコミッションワーク、レジデンスプログラム、アートやキュレーションの教育のプラットフォームなどを通し、ジョグジャカルタの様々な人たちとつながるプログラム (現在開発中) を開始予定。



シヨーンedd・ヒューズ

Sioned Huws

ダンサー、コレオグラファー (イギリス)

1965年生まれ。1989年にニューヨークのマース・カニングハム・スタジオで学びながら、コンテンポラリーダンスとパフォーマンスを創作し始める。2008年から石川流の師範、石川義野から津軽手踊を学び、現在は岩手で山流山口派の柿内沢鹿踊を学んでいる。彼女の作品は知覚、記憶、人、振付の構造内での場所、つまり身体的な運動の認識を通して感じられる範囲において、予想外のことを可能にする細部をパターン化するシステムにフォーカスしている。長期にわたって日本と欧州のダンサー、歌手、ミュージシャン、地域社会とコラボレーションするプロジェクトを行っており、青森プロジェクトでは2008年の創立時から芸術監督を務め、世界各地でのツアーも行っている。



ヌル・アクバル・

アロファトウラ

Nur Akbar Arofathullah

研究者、Lifepatchの共同創設者 (インドネシア)

農業バイオテクノロジー分野の研究者で、現在は東京農工大学大学院生物生産科学専攻に在籍。先端的な研究を行う傍ら、自分でもなぜ作ったかわからないような様々な装置を作ることを趣味としている。現在は、茨城県稲敷郡阿見町に在住し、DIYで取り組む生物学と、汎用・低コストな実験装置の開発に興味を持っている。さらに、茨城大学で、温室管理のためのオープンプラットフォームのユビキタス環境制御システム (UECS-Pi) の導入に取り組むつつ、東京農工大学大学院でトマト苗の熱ショック誘導抵抗性の分子メカニズムを研究中。

Lifepatch - citizen initiative in art, science and technology

アート、科学、テクノロジーの領域で横断的な活動を行う組織。インドネシアのジョグジャカルタを拠点に、2012年の結成以来、地域社会におけるテクノロジー、天然資源、人的資源の調査・研究・開発に取り組んでいる。とりわけ地域と協働する活動においては、多様性の実現とクリエイティビティの活性化を図るため、その環境づくりを重点的に行っている。発酵技術やプログラミング等の技術を多用したワークショップを多数開発。スタジオでの自主企画のほか、Hackteriaネットワークと協働し、2014年にはオープンソースを活用したアート・科学におけるプロジェクトのプラットフォーム「HackteriaLab」を共同開催。



日沼禎子

Teiko Hinuma

キュレーター、女子美術大学芸術学部
アート・デザイン表現学科アートプロデュース
表現領域准教授、陸前高田AIRプロ
ラムディレクター (岩手県、東京都)

女子美術大学芸術学部卒業。ギャラリー運営企画会社、美術雑誌編集者等を経て、1999～2011年まで国際芸術センター青森設立準備室・同学芸員として、アーティスト・イン・レジデンスを中心としたアーティスト支援、プロジェクト、展覧会を多数企画、運営に携わる。さいたまトリエンナーレ2016 プロジェクトディレクター等を歴任。



杉原信幸

Nobuyuki Sugihara

アーティスト、信濃の国 原始感覚美術祭アートディレクター、NPO法人原始感覚舎理事長 (長野県)

1980年長野県生まれ。2007年東京藝術大学油画専攻修了。詩人の吉増剛造ゼミ参加。2008年個展『丸石座』詩人の吉増剛造と共演。2010-12年「会津・漆の芸術祭」参加 (嘉永蔵／二十間蔵／福島)。2011 / 2012年「ストーンサークルフェスティバル」(大山ふるさと資料館/小牧野遺跡/青森) 縄文友の会 (田口ランディ、山田スイッチ) と現代のストーンサークル制作。2016年「ストーンプロジェクト」(スウェーデン)、2017年「北アルプス国際芸術祭」(長野) 参加。2014年「大町冬期芸術大学」空間美術コース講師。2010年より「信濃の国 原始感覚美術祭」を主催。

信濃の国 原始感覚美術祭

探検家・食生態学者の西丸震哉の記念館を中心に、木崎湖畔で無農薬のお米作りを行う農家の心意気に惹かれて集まった仲間たちが、大地とともに生きる「生活における花」としての祭を作り上げてきた。原始感覚をキーワードに、ジャンルを越えた表現者を招へいし、木崎湖畔で滞り制作を行うことで、その土地に生きる人と出逢い、その地でしか生まれえない作品制作と、公演・ワークショップを行う。



松山隼

Jun Matsuyama

陸前高田AIRコーディネーター、
アーティスト (岩手県)

1985年宮城県生まれ。東北芸術工科大学芸術文化専攻修了後、山形で若手クリエイターのシェアアパート「ミサワクラス」を立ち上げ、2009年から2013年まで運営。同大学の助手、ファシリテーター (講師) を勤めた後、2013年より陸前高田AIRのコーディネーター、2015年より国際ダンス交流プロジェクト「Odori-Dawns-Dance」のコーディネーターを務める。

陸前高田アーティスト・イン・レジデンス プログラム

2013年より、海外から日本へ、東北へ思いを寄せる国内外のアーティストが地域に滞在し、人々の生活に寄り添いながら、大切な記憶を拾い上げ、記録し、伝えることを目的とした活動を行う。アーティストによるリサーチ、制作、交流を中心に、東北各地でアートを軸とした活動を行なう人々をつなぎ、共に考える「陸前高田ミーティング」等を実施している。

2017.9.22

リアス・アーク美術館

津波災害を繰り返してきた土地で、美術館がすべきこととは

1日目。集合場所のいわて花巻空港とJR一ノ関駅から、それぞれ送迎の車でリアス・アーク美術館へ移動。主催のS-AIR代表柴田からAIR CAMPの簡単な説明がされた後、学芸係長の山内宏泰氏に進行をバトンタッチし、「東日本大震災の記録と津波の災害史」常設展示会場へ。氏からは、震災発生直後から2年にわたって当美術館の学芸係の方々が中心となり震災被害記録・調査活動を行ったこと、その活動から約30,000点の写真記録、約250点の被災物の収集等、膨大な資料を得たこと、常設展ではそこから厳選した写真203点、被災物155点、歴史資料等137点を展示していることが説明された。山内氏は「大災害に遭遇した時に自分たちが何をすべきなのか、明確に意識している美術館（博物館）は少ないのではないか」と一言おき、取材調査を始めた経緯について「津波を文化的出来事と捉え、この状況の記録を取り、資料化して残していくことが自分たちにしかできない職務

だと考えた」と説明。「悲劇を乗り越えどのように復興したのかという、人が自然に打ち勝つストーリーではなく、なぜこのようなことになったのか、こうならないためにはどうすればいいのか、というストーリーを提案したい」と語った。三陸沿岸部には、平均すると約40年に一度の頻度で大津波が襲来しており、その都度甚大な被害が出ているにも関わらず、2011年当時、地域住民の津波に対する関心は高くなかったという。過去に何度も津波災害を繰り返している事実がある以上、震災発生直後に語られた「未曾有」、「想定外」という言葉は適切ではない。だがしかし、伝承は日常の中で必要性が薄れると途絶えてしまうものであり、「必要性を途絶えさせないことが美術館（博物館）の仕事であり、これらは次の津波に備えるための記録なんです」と山内氏。気仙沼市内で浸水、壊滅という被害を出した地区の多くは戦後の埋立地であり、高度経済成長期の開発とともに造られた街なのだそうだ。「津波の発生を阻止できないなら、自分たちの生き方を変えるしかない。地域文化を進化させるしかない」。氏の言葉は、この3日間を通じて何度も立ち返ることになる問いとなって、その場にいた人たちの心に強く刻まれたのではないだろうか。



2017.9.22

Rias Ark Museum of Art

Leaving from the meeting points of Iwate Hanamaki Airport and JR Ichinoseki Station in their vehicles, AIR CAMP participants headed for the coast and the Rias Ark Museum of Art in Iwate prefecture, Japan. AIR CAMP 2017 began with a brief introduction of the event by the organizer Hisashi Shibata, the director of S-AIR, then participants moved to the permanent exhibition of “Records of the Great Eastern Japan Earthquake and the History of the Tsunami Disaster”. The artistic director of Rias Ark Museum of Art, Hiroyasu Yamauchi explained this exhibition as follows: “Over the two years just following the 2011 Tōhoku earthquake and tsunami disaster, a team with the specialists of this museum researched and documented the tragedy, amounting to 30,000 pictures, 250 collected objects, and piles of articles. From these artifacts, the exhibition features 203 selected photographs, 155 objects and 137 historical documents. “There are a few art museums and other museums conscious about their positions when they face such a large scale disaster. Our museum considered the tsunami disaster as a cultural phenomenon so we committed to recording and to realizing the archive of this catastrophe. That is our destiny. This exhibition proposes the story of anti-disaster measures—why it happened and how people could prevent it—instead of the story of revitalization—overcoming sadness and

how humans take over nature, which is often the focus when archiving such a tragedy.

Prior to 2011, a large-scale tsunami had come in a cycle of almost every 40 years to the Sanriku coast and every tsunami brought large catastrophes to this area. However, local residents did not have a large concern about tsunamis at the time of 2011. Because of the fact that the Sanriku coast experienced several tsunami disasters in the past, the word “unpredictable” and “unexpected”, overused in the media right after the disaster, are not appropriate. At the same time, historical consciousness gets lost when they aren’t related to pressing needs in daily life. As Yamauchi said: “Keeping memory alive is invaluable for art and other museums, and this archive is to prepare for the next tsunami disaster”. Most of the areas flooded and destroyed by the tsunami were ground infilled after World War II, and had developed during the fast growth of the economy in 1970s Japan. “If it is impossible to prevent tsunamis, then we must change the way we live and by doing so, local culture has to progress.” Yamauchi’s words indelibly marked the minds of participants that arose as questions several times during the three days of workshop.



2017.9.22

奇跡の一本松

目の前の光景と
向き合う

リアス・アーク美術館を出発し、車は岩手県陸前高田市市内へ。車内でお互いの自己紹介などをしてしていると、あっという間に到着。講師で陸前高田AIRコーディネーターの松山隼氏から、周辺に残る震災遺構や奇跡の一本松保存プロジェクトについて説明があり、高田松原を再生するために2017年5月に行われたマツの植栽や、設置が予定されている「高田松原津波復興祈念公園」について紹介された。参加者はしばらく目の前の光景と向き合った後、次の講演場所である佐藤たね屋さんに向かって出発。

2017.9.22

Miracle Pine

Jun Matsuyama, the Rikuzentakata residency coordinator told us about the restoration of the ruined building structure and the miracle pine preservation project in Rikuzentakata, Iwate prefecture. He also presented an event of planting pines for the revival of Takata Matsubara field in May 2017 and the “Takata Matsubara Tsunami Revival Memorial Park” plan.



2017.9.22

佐藤たね屋

心に希望のタネがある限り、人はどこでも生きていける

車窓から、かさ上げ工事が行われている市街地の風景を見つめながら、佐藤たね屋に到着。一同を迎えてくれた店主・佐藤貞一氏から話を伺った。津波で自宅兼店舗を流されたが、元の場所に瓦礫で仮設店舗を作り、すぐに営業を再開したこと。現在の場所に移転オープンする時に、仮設店舗時代の手書き看板も持ってきたこと。また、お店宛にバルセロナの子供たちから寄付金が届いたお礼として、バルセロナに赴きスペイン語で話してきたエピソードと、その時に行った震災前後の陸前高田の状況を説明するプレゼンテーションを見せてくれた。最後は「The Seed of Hope in the Heart (心に希望のタネを)」という言葉を紹介し、「心に希望のタネが、復興のタネがある限り、人はどこでも生きていける」と結んだ。氏が震災のことや陸前高田の歴史文化について英語で執筆し、自費出版した同タイトルの本について質問が出ると、挿絵も全て自分で描いていることや、写真では表現できないことを絵にしているという想いが語られた。最後は、バルセロナでのトークのお礼に寄贈されたスペインギターを手に、見事な演奏を披露してくれた佐藤氏。震災直後、自らの手で生活を取り戻す過程で深まっていた土地や歴史への理解、何かに突き動かされるように震災のことを世界に発信し続ける氏の姿勢から、「生活と創造」というテーマについて深く考えさせられた貴重な時間だった。

2017.9.22

Sato Taneya

Looking through the car window on the way to the Sato Seeds Store, we passed by fields under construction to create a new base for the city. The store's owner Teiichi Sato welcomed us all to his store. He talked about the episode in the disaster where his house/store was swept away by the dark tsunami water. But right after the disaster, he built a temporary store with bricks to reopen his business at the same site where his previous place was. When the store relocated and reopened as a regular business on a new site, he brought along the sign that he had drawn for his temporary store. Sato Seeds received donations from children in Barcelona, and in return he visited Barcelona and made a speech in Spanish, in which he showed the audience about Rikuzentakata before and after the disaster. “The Seed of Hope in the Heart” is his phrase meaning with the seeds of hope and recovery in the heart, people could survive anywhere. He also self-published a book with the same title “The Seed of Hope in the Heart” in which he wrote in English and drew about the culture and history and the disaster of Rikuzentakata. He draws when he is not able to express through his photography. By the end, he pulled out a guitar, a gift from the people of Barcelona, and played amazingly. This session was an absolutely valuable experience for us to consider the theme of “Everyday life & Creation” through the attitude of Sato who communicates to the world about the disaster as if he was passionately motivated by something. Also, participants deeply appreciated his knowledge about the local land and history through the process of regaining normality in everyday life.



2017.9.22

S-AIRと陸前高田AIRによる プレゼンテーション

宿泊先である箱根山テラスに到着し、早速主催であるNPO法人S-AIRの代表柴田によるプレゼンテーションがスタート。合宿型WSのAIR CAMPについて「アーティストのお世話をする側のスタッフにはレジデンス経験のない人が多いので、自らがレジデントとして他の団体のホスピタリティを体験しながら、いろいろなAIR団体の人と意見交換をする勉強会として始めた」と紹介。「AIRプログラムは住居から人との交流までを含

め、アーティストが活動するための環境、生活をつくる仕事」と前置き、「生活と創造」というAIR CAMP 2017のテーマに触れながら、「今回のAIR CAMPを通して、改めてAIRについて捉え直してみたい」と説明した。その後、S-AIRのこれまでの活動が紹介された。

続いて、陸前高田AIRによるプレゼンテーションがスタート。最初に陸前高田AIRプログラムディレクターの日沼禎子氏から、日本のAIRの現状や多様化す



札幌で撮影・制作を行った短編映画「Hungry for Love」
Still image from *Hungry for Love* (Justin Ambrosino)



幌延新地層研究センターへの調査
Research trip to Horonobe Underground Research Center, Hokkaido
(Warren Harper & James Ravinet)



アピチャッポン・ウィーラセタクンによるレクチャー
After AIR: Lecture by Apichatpong Weerasethakul
Image courtesy of Harebare_photograph

2017.9.22

Presentation by S-AIR and Rikuzentakata AIR

るAIRの目的が語られた後、陸前高田AIRコーディネーターの松山隼氏から、これまでの滞在アーティストの活動が紹介された。2016年からは実験的にリサーチャーも招へいしていること、2013～2017年まで毎年招へいし、各年半年間程度滞在しているショーネッド・ヒューズ氏の取り組み、2017年からは拠点としての施設を整え、まちづくりの速度と合わせてAIRプログラムを実施していく予定であることが話された。

Hisashi Shibata, director of NPO S-AIR introduced S-AIR and the AIR CAMP. Then, the program director of Rikuzentakata AIR, Teiko Hinuma, presented the trends of current residencies and diverse goals and purposes of residencies in Japan. Finally, the program coordinator Jun Matuyama talked about the activities of past artists in Rikuzentakata AIR.



中心市街地の山上げの土が運ばれてきた
受容地に関するインタビュー



2017年9月 AIR 2017
Choi Jasepreapthaphan / チョー・ジャネプアツワツワン

2017.9.23

プレゼンテーション1

プレゼンター:アレック・ステッドマン(Cemeti - Institute for Art and Society共同チーフキュレーター)

国内における
アートのランド
スケープを理
解し、
自らがすべき
ことを探る

公(パブリック)にすること
チェメッティ - インスティテュート・フォー・
アート & ソサエティの歴史と未来を主観的
に読み取る

合宿二日目は、インドネシアで最も歴史のある現代アートのプラットフォーム「チェメッティ - インスティテュート・フォー・アート & ソサエティ」共同チーフキュレーターのアレック・ステッドマン氏によるプレゼンテーションからスタート。1988年にインドネシア初のアーティスト・ラン・スペースとして設立されたチェメッティは、ビジュアル・アーツだけにとどまらずダンス、演劇、文学等あらゆるジャンルのアーティストが集まって議論する、当時のインドネシアではかなり特殊な場所として活動を開始し、2008年からはAIRプログラムも運営している。彼らのプロジェクトは政治情勢に関連するものや、コミュニティと直接関わるものが多く、国内外のアーティストと共に活動しながら、さまざまなモデルを作ってきた。ステッドマン氏は、サンネ・ウーストハイゼン氏との共同チーフキュレーターとして2016年11月にチェメッティの運営を引き継ぎ、現在は「メンテナンス・



ワーク」というプログラムを実施中だ。最初に行われたのが「プレゼンテーション」と名付けられたプロジェクトで、氏は「チェメッティが始まった頃から、アートのランドスケープがどのように変わってきたかを理解しなかった」と言う。50を超えるアート組織がジョグジャカルタで活動する現在において、チェメッティは何をすべきか理解するための実践として、異なるグループに対するビデオ・インタビュー、さまざまな団体のプロジェクトを取り上げた展覧会、AIRに関するリサーチや意見交換を行う合宿型WSのことなどが紹介された。現在「メンテナンス・ワーク」は次の段階に進み、新しいプロジェクトを展開中とのこと。最後は「レジデンスのことや、アーティストとどういう形でつながり、どういうものを作り上げていっているのか、チェメッティにはいろいろなモデルがあるので、この二日間を通して話し合いたい」と結んだ。歴史ある組織においてプログラムのアップデートをどう行うか、多くのヒントをもらうことのできたプレゼンテーションとなった。



Presentation by Maryanto as part of 'Artist Job Fair' (2017) by Wok The Rock, (Berbagi #3).
Image courtesy: Cemeti - Institute for Art and Society.

2017.9.23

Presentation 1

Alec Steadman
Co-Chief Curator at Cemeti - Institute for Art and Society

Making Public(s): A subjective
reading of the histories and futures
of Cemeti - Institute for Art and
Society

Cemeti - Institute for Art and Society (formerly 'Cemeti Gallery', then 'Cemeti Art House'), is the oldest platform for contemporary art in Indonesia, founded in 1988. In 2016, a new team took the helm from the artist founders, with Alec Steadman joining as Co-Chief Curator (together with Sanne Oorthuizen). The new team used the first year to think through alternative possible futures for Cemeti via the year-long program 'Maintenance Works'. Today with more than fifty art organizations in Yogyakarta, the new team felt it important to use this moment of change to ask basic questions like; what is a gallery for and what can an art institutions do. His talk inspired audiences about updating institutions according to the demands of changing art landscapes.



Workshop with local school children as part of 'Museum of The Ordinary Things' (2017) by Eko Prawoto, (Berbagi #1).
Image courtesy: Cemeti - Institute for Art and Society.

2017.9.23

プレゼンテーション2

プレゼンター：ウバトサット(The Land Foundation)

ユートピアを現出させた
プロジェクトの現在進行形

ランド・ファウンダーションの ソフト的自給自足性と無条件性

続いて、ランド・ファウンダーションのウバトサット氏によるプレゼンテーションが行われた。1997年にタイを中心に始まったアジア通貨危機によって国内はカオス状態に陥り、全てが変わっていく中、「オルタナティブ」という言葉が重要性を増していったと説明。ウバトサット氏は「オルタナティブ」を語る上で外せない流れとして、90年代に始まった野外彫刻芸術展「チェンマイ・ソーシャル・インスタレーション」を挙げた。アーティストが市場、寺、病院などの公共スペースでアート・プロジェクトを実施する画期的な試みで、当時かなり注目を集めたようだ。その流れの中で、98年、タイを代表するアーティストのKamin Lertchaiprasert(カミン・ラーチャイプラサート)と Rirkrit Tiravanija(リクリット・ティラヴァーニャ)によって始まったのが、持続可能な農業、瞑想、アートを融合させる実験的な「The Land(ランド)」プロジェクトだ。氏は「ランドにとって、そこから2004年までの間はゴールデン・エイジでした。しかし、ランド



Nico Dockx / the bridge
Photo by Sab Charnkiat

2017.9.23

Presentation 2

Ubatsat
Member of the Land Foundation

'Soft' Self Sufficiency and the Unconditionality of the Land Foundation

がアートピースになっていくことで、多くの疑問が生まれたことも事実です。世界中からたくさんの依頼が舞い込み、最早二人だけでハンドリングすることが困難になったため、彼らはランドを財団にする必要がありました」と言う。2004年にランド・ファウンダーションが設立され、国内外でいくつかのプロジェクトを展開するが、その後数年間は農業に集中。目立ったムーヴメントのない時期を経て、2016年に有機農業をスタート、2018年にはレジデンス・スタジオが完成する予定だ。これらはランドをよりユートピアにするための試みであり、新旧のランドをつなぐ架け橋として位置付けられている。タイの政治状況が依然として不安定である中、ウバトサット氏はランドを含めた状況について「輪廻転生」と表現した。経済危機によって国が崩壊し、新しいムーヴメントが生まれ、ランドも最盛期を迎えた。そこから現在に至るまで、国内のアートをめぐる環境も、社会的な状況も、国のシステムも変化する中、氏の言う「輪廻転生」はどのような形を今後私たちに示すのだろうか。チェムッティとはまた異なる、老舗団体の現在と未来に思いを馳せる貴重な時間となった。

Ubatsat explained the history of The Land Foundation, which started in 1998 in Thailand, was an experimental hybrid project among sustainable agriculture, meditation and art practice. Recently, The Land set itself up for organic agriculture and is currently under construction to host an artist residency and a studio space. While rapid changes in society, the political situation in Thailand, and the Asian Financial Crisis have become old history, Ubatsat expressed their future as “a never-ending cycle of life and death”. With The Land as an example, in this session the audience meditated on the next art movement.



Photo by Aroon Purithat



Alicia Framis / blind date house
photo by Sab Charnkiat

2017.9.23

気仙大工左官伝承館

語り部の声に
耳を澄ます

午前の部が終了し、一同は昼食をとるため箱根山テラスから徒歩5分ほどの伝承館へ移動。併設のはこね食堂から料理が届くまでの間、館長でもあり語り部でもある武蔵裕子氏から、気仙大工の歴史や伝承館について、また震災当時の様子について話を伺った。震災後に神戸の人が作ってくれたという気仙大工左官伝承館の歌があり、お話の最後に武蔵氏が披露してくれた。



2017.9.23

Visit to Kesen Daiku Sakan Folklore Museum

The director and storyteller, Yuko Musashi introduced the history of Kesen Daiku (regional specialty carpenter), and this museum and how they related to the 2011 Tōhoku earthquake and tsunami disaster. By the end of the presentation, she sang the Kesen Daiku Sakan Folklore Museum song which was gifted after the disaster from a person in Kobe, Hyogo prefecture, where people had experienced The Great Hanshin earthquake of 1995.



2017.9.23

行山流山口派柿内沢鹿踊芸能保存会による鹿踊

レクチャー

講師：ショーネッド・ヒューズ(ダンサー、コレオグラファー)

「すでにあるもの」を
もっと理解する



”ダンス”によって測られる時間 — ”ホーム”の尺度としてのコミュニティ

昼食後は再び箱根山テラスに戻り、行山流山口派柿内沢鹿踊芸能保存会による鹿踊を鑑賞。保存会の橋本会長から、柿内沢鹿踊やこの日に披露した踊りについての解説がされた。参加者から振付や歌詞の意味について盛んに質問があり、休憩時間を通して和やかな交流が行われた。

続いて、ショーネッド・ヒューズ氏によるレクチャーがスタート。テラスで観客と踊り手の場所を明確に区別しない形で鹿踊が始まったことについて、「鹿踊は日常生活に出てくるものなので、見ている人にも参加してもらいました。踊り手も見ている人も同じ立場にいる、つまり、鹿踊はひとつのコミュニケーションの取り方なのです」と解説。鹿踊の最中、踊り手の子供が横で真似していたことに触れ、「鹿踊は有機的に受け継がれるものです。子供達は練習室に出入りして、音やタイミング、テンポを吸収し、大人の踊り手の動きを真似します。遊びと学習が一体化しながら、楽しい経

験として全てを覚えていくのです」と語った。「基本的に自分がそのダンスに興味を持ったら、いつもそのダンスについていくことにしている」と言うヒューズ氏が、柿内沢鹿踊に出会ったのは2014年のことだ。そこから2年間、柿内沢の鹿踊や人を知る中で、「すでにこの世にある伝統的なダンスについて知らないことがあるのに、新しいダンスをつくる意味はあるのだろうか？もうすでにあるダンスのことを、もっと理解した方がいいのではないだろうか？」という疑問が生まれ、それに対して考えているところだと話した。

最後にヒューズ氏はこう語って、レクチャーを終えた。「一番最初に陸前高田AIRの招へいで来たとき、こんなひどい状況でアートは本当に役に立つのか、自分には何ができるのか、いろいろ考えました。事前にインターネットで陸前高田について調べてみましたが、震災に関する情報しか見つけられませんでした。その中で菅原みき子さんと佐藤直志さんという名前を見つけ、コーディネーターの松山さんに伝えたとこ、つないでくれたのです。二人は芸術や文化をとっても大事にしている人たちで、私のことをいろいろ助けてくれました。頼れるのは人だけです。文化は人で成り立っています」。



2017.9.23

Gyozan-ryu Yamaguchi-ha Kakinaizawa Shishi-odori (a regional dance of Iwate)

Lecture

Sioned Huws
Director, Choreographer and Dancer

Time measured by 'Dance' -
Community a measure of 'Home'

At Hakoneyama Terrace, a deer dance was performed by Gyozan-ryu Yamaguchi-ha Kakinaizawa Shishi-odori team. After the dance, Sioned Huws, who has been committed to residential work in Rikuzentakata, Iwate prefecture for half a year every year since 2014, presented about the concept of the deer dance. While she was learning this dance, a question arose: "Is it better to learn an existing dance, to work on ways of re-framing it, for it to be shared more broadly, rather than producing a new choreography?" Thus, she has been working on it everyday.



2017.9.23

プレゼンテーション3

プレゼンター：杉原信幸（信濃の国 原始感覚美術祭アートディレクター）

弱さや逆境と結び付いた
創造性と、原始感覚

まれびととしてのAIR、 旅する原始感覚と 原始感覚美術祭について

お菓子とコーヒーで休憩後、3つ目のプレゼンテーションがスタート。信濃の国 原始感覚美術祭は、生活や信仰、農業、経済、科学など「生きることそのもの」をつなぐ文化をつくることを目的に、2010年から開催されている。杉原氏の話は、「旅の本質が弱さと逃げることにある」という印象深い言葉から始まった。「(美術祭のトークで招いた)探検家の関野吉晴さんが言うには、争いを好まない弱い人たちが、既得権益を持った中央の争いから逃れて移動していく。彼らは新しい土地に辿り着くと、そこで新しい文化をつくる。弱さや逆境こそが創造性であり可能性であって、周縁のボーダーへと常に逃れていくものが、創造性と芸術家と呼ばれるものの本質だと。美術祭のサポーター、作家、地元実行委員が一丸となって祭りをつくり出すことで、社会の中で疎外感を感じてしまう弱者を受容し、創造の現場を共にすることで成長を遂げていく状況とリンクして、すごく面白いと思いました」。原



始感覚美術祭の歩みは、杉原氏の「祭りをつくる」ことに対する考察の蓄積とも言える。例えば、2015年の「原始感覚セルフ祭」で、巨大な山車を作って練り歩き、最後に神社で燃やすというクライマックスのシーン。炎に丸太の神輿を担いだ男たちが突っ込む。段取りを決めていない即興性の中から、突然「回れー」という掛け声が発せられる。そして、炎を中心に9mの丸太が回転し始めた時、杉原氏は「祭りが生まれる瞬間を感じた」と言う（これは、会場が特に湧いたエピソードだ）。2017年は本物の祭りのやり方に習い、祝儀での開催に挑戦。3日間に渡る「みのくちまつり」の最後に起こった、子どもの叩いた太鼓によって観客と演者が共に踊り続ける「祭りが生まれた瞬間」を紹介した。最後に前日の視察のことに触れ、「語り部としてのアートが生まれざるを得ない状況が、陸前高田にはあるのではないか」と話した杉原氏。自然と共に生きる叡智としての原始感覚、陸前高田で私たちが会った語り部、弱さや逆境と結び付いた創造性、そこから生まれる文化。滞在中に得た無数のキーワードがつながり始める予感とともに、プレゼンテーションは終了した。



「原始感覚獅子舞」田口ランディ、杉原信幸、佐藤啓、浅井真至／2017年

2017.9.23

Presentation 3

Nobuyuki Sugihara
Director of Shinano Primitive Sense Art Festival

Primitive Sense Art Festival - travelling with primitive sense

"The essence of travelling is to embrace the weakness and to escape". With this quotation from the explorer Yoshiharu Sekino, Nobuyuki Sugihara introduced his thoughts about constructing a festival. Then, he pointed out the necessary emergence of storytelling as an art form in Rikuzentakata City. As a result of these elements together—primitive sense as deep knowledge by living in harmony with nature, local storytellers and creativity confronting weakness and adversity—new culture is formed. It was a significant lecture that connected everything from the past three days.



ジャン・サスポータス×齋藤徹 杉原信幸(美術)／2017年
撮影 本郷敦史

2017.9.23

プレゼンテーション4

プレゼンター：ヌル・アクバル・アロファトゥラ (Lifepatch共同創設者)

社会に役立つ
実践的な技術を研究・開発し、
市民と共有する

ライフパッチ — 芸術、科学、テクノロジーにおける 市民の取り組み

揚げたてのテンペ(大豆の発酵食品)を全員でつまんだところで、いよいよ2日目最後のプレゼンテーション。ライフパッチは、科学者、プログラマー、デザイナー、アーティスト、キュレーターといった多様なメンバーで構成される組織で、プレゼンターのヌル・アクバル・アロファトゥラ氏は農業バイオテクノロジー分野の研究者だ。ライフパッチはメンバーの背景を生かしたワークショップの開発と実践を活動の中心に据えており、市販のウェブカメラを用いたオリジナルのキットで顕微鏡を作るワークショップ、「スクエアシンス」というモジュールを使って参加者がオリジナルのシンセサイザーを作るワークショップ(休憩時間にみんなで試食した)テンペづくりワークショップなど、その内容は多種多様だ。アロファトゥラ氏は「HackteriaLab」「Jogja River project」「Mingapa Bigini Mingapa Bigitu(インドネシア語で「これは何、あれは何」という意味)」という3つのプロジェクトを紹介。HackteriaLabは国内外の



2017.9.23

Presentation 4

Nur Akbar Arofataullah
Co-Founder of Lifepatch

Introduction to Lifepatch – citizen initiative in art, science, and technology

Lifepatch is an organization based in Yogyakarta, Indonesia to develop and realize workshops with the cross-disciplinary backgrounds among members. The co-founder Nur Akbar Arofataullah talked about how their project would contribute to social innovation. Lifepatch learns, researches and develops practical skills, and the outcome is presented as an open resource for citizens and society. Creativity is displayed through sharing that knowledge with the community. There were many inspirations in their projects around the theme of “Everyday life & Creation”.

アーティストや科学者、デザイナーが一堂に集い、学術的な協働を行うもので、2014年はライフパッチがホストを務めジョグジャカルタで開催。地元の人をファシリテーターに、ワークショップによって浮き彫りになった地域の社会的・生態学的問題を、展覧会の形でアウトプットした。「Jogja River project」は、2011年にジョグジャカルタの地域社会とのコラボレーションからスタート。水質調査などのワークショップを実施し、住民が川やその水質について理解を深めることを目的としている。「Mingapa Bigini Mingapa Bigitu」は、地元で定期的に行う小さなイベントやプロジェクトのことで、地域の人たちと彼らの活動のプロセスや知識を共有するための場となっている。ライフパッチのプロジェクトは「エコロジカル・リサーチ、アートプロジェクトを含んだコラボレイティブ・リサーチ、オープン・ソーシャル・ネットワーク」という3つのトピックに基づいており、氏は「これらのプロジェクトがどのようにソーシャル・イノベーションに寄与するのを見てみたい」と語る。社会に役立つ実践的な技術を研究・開発し、ワークショップによって市民が実際にそれを使ったり、うちなるクリエイティビティを発揮できるようにする。ライフパッチの活動は「生活と創造」という部分で、非常に示唆に富む内容だった。



Image courtesy: Lifepatch

2017.9.23

鶴亀鮓

夜は鶴亀鮓で交流会。
最後は鶴亀鮓名物、
リボン投げで写真撮影！



2017.9.23

Tsurukame-Sushi

A party at night in Tsurukame Sushi. A group photo was taken featuring the special Tsurukame tradition of throwing ribbons!



DAY 3

2017.9.24

陸前高田音頭WS

いよいよ最終日。トーク前の時間に、陸前高田の盆踊りの定番曲「高田音頭」を、菅原みき子氏とショーネッド・ヒューズ氏から習って踊るWSを急遽開催。「来っせ、寄らっせ、マタオイデ〜♪ 高田ヨイトコ、ミナオイデ〜♪」



トーク

トーク：畠山直哉（写真家）

聞き手：日沼禎子（女子美術大学准教授・陸前高田AIRプログラムディレクター）

わかりやすい形じゃない、
うまく整理できない形で、
最終的に社会の中で
ある位置を占める作品がある

畠山直哉氏のトークは、日沼禎子氏の提案でレジデンスに関する話題から始まった。畠山氏は2009年と2010年にフランスで一カ月ほど滞在しながら撮影した、ボタ山のシリーズを紹介。石炭産業が終焉を迎え、地元の人にとってボタ山は複雑な想いを喚起させるものであったことを例に、社会参加と写真の関係について「ある場面では、写真撮影は社会参加に背く行為にならざるを得ない。共同体の外に出ることでは、共同体を撮影することはできない。つまり非参加の態度が、写真を生み出すケースがままあります」と

切り出した。次に、2015年のメキシコ滞在時、「（ここで撮影した写真が）メキシコの人のためにならないのだとしたら、その写真にはどんな意味があるのか」と問われたエピソードを紹介。「それでも自分が撮りたい写真を撮っていましたが、その写真を見てメキシコの人たちが喜ぶかどうかは自信がない。ただ、写真家は伝統的に、その地域の人から後ろ指をさされようが気にせず仕事をしてきました。そういった人たちを、地域貢献という枠組みのもとAIRで呼べるのか。それは難しい問いになると思います」と続けた。

これに対して日沼氏は、「AIRはアーティスト支援が原点。しかし、運営側として毎回その狭間に揺れることがある」と前置き、陸前高田AIRについて「来てしまったはいけど、ここでできることなんて何もないじゃないかという所に立たされる状況から、それでも何かを見つけようとしてしまう。それが、表現者の持っている何かだと思う。そこで残されたものをアーカイブすることで、もしかしたら10年後にそれが何だったのかわかるかもしれないという、手探りの状態です。以前、畠山さんがあるインタビューで「僕自身は後ろを向いて、背中を前に向けて進んでいる」とおっしゃっていました。つまり、今ここ、よりむしろ、常に過去と向き合っている。それが、長い時間をかけて、社会貢献、あるいは宝物になっ



Talk

Naoya Hatakeyama / Photographer

Teiko Hinuma / Associate Professor at Joshibi University of Art and Design, Program Director at Rikuzentakata AIR

ていくのではないのでしょうか。その役割を期待して、ここでのAIRを行なっています」と応答した。

続いて畠山氏は、2016年にせんだいメディアテークで開催された個展『まっぶたつの風景』を紹介。「6年という時間の厚みが目の前に地層のように現れる経験をした」と言う約600枚のコンタクトシートの展示について、「これが陸前高田の人たちを勇気付けるか僕は全然わからない。これが社会参加になるかどうかともわからない。アートは社会とつながるべきであるという考え方は大切だと思うけど、わかりやすい形じゃない、うまく整理できない形で、最終的に社会の中である位置を占める作品があると思う」と語った。さらに、2000年頃から撮り始め、当時は公開する気持ちのなかった陸前高田市気仙町の写真を震災後に公開したことに触れ、「何でもない写真なんだけど、この全てがもうないと思うと特別なものに見えてきます。でも、これをアートと呼べるのかどうかは考える必要がある。つまり、僕は意図していなかったけれど、世の中の出来事によってこれらの写真に見るべき価値が突然生じてしまった。これがアートの議論にどう結びついていくのかは古典的な話になりますが、それを端折ったまま、アートの話をこれ以上続けることはできないと思うんです」と結んだ。



まとめ

最後のまとめの時間は、参加者から挙げられたキーワードをもとに3日間を振り返り、未消化なままでも思っていることを話してもらった。参加者からは「文化や地域について考えるためには、1年とかそういう単位じゃないなと思った」「被災地という捉え方から、出来事があった場所、陸前高田という場について認識が変化していくことを感じられてよかった」「何がその地域に住む人たちにとって幸せなことなのか、考えて運営していくことが大事だと思った」等の想いが語られた。

次に講師からも、キーワードに絡めて以下の応答があった。

「アートは何に役立つのかという質問にいつも返ってきますが、私は、アートは何にでもなるのだと思っている。そこからアートをする上での責任につながってくるのですが、なぜそれをするのかということが大事。アートのフォームは中身に準じ、重要なのは創造性のスケールをどう捉えるかということだと思います」。(アレック・ステッドマン氏)



「コミュニティというキーワードをもとに話します。ライフパッチでは身体的に同じ場所で過ごし、リアルに人と関わりながらプロジェクトを進めています。人々を助けるということではなく、人々が自分たちの手助けをできるように手助けをしています。そのために自分たちの活動を記録にとって、全てオンラインでシェアし、誰でもアクセスして見ることができるようにしています。簡単なことでいいので、できる範囲で共有することが重要です」。(ヌル・アクバル・アロファトゥラ氏)

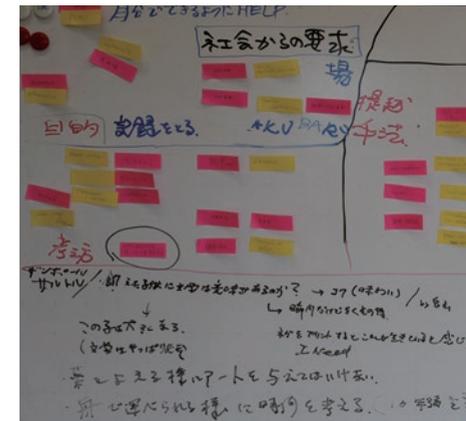
「私はこの後、陸前高田で2か月間、滞在制作をします。タイで2004年に大きな地震があった時、私はボランティアで遺体を運ぶ手伝いをしました。その時に両親を失った子供と出会い、私は小さなモニュメントを作ろうと思いました。最初にスケッチを描いて、後からブロンズ彫刻にしてオスロのビエンナーレで発表しました。なくなってしまったものはあるけれど、作品として形に残るものも作ることができました。陸前高田でも、何か良い作品ができたらいいなと思っています」。(ウバトサット氏)



「震災後、避難場所から仮設住宅に、そして新しくできた自身の家やアパートに人が少しずつ移っていき、震災後にできていたコミュニティがどんどん分散しています。他に選択肢はないけれど、それが寂しい。畠山さんや杉原さんのレクチャーを聞いて、離れていたコミュニティが近くなった気がしました。畠山さんが撮った震災前の(陸前高田の)写真からは、彼の中に今でも残っている記憶や感情が伝わってきて素晴らしいと思います。これから日常生活に戻りますが、寂しいと思うことも素直に話せて良かったです」。(ショーネッド・ヒューズ氏)

「昔、フランスの作家であり哲学者であるジャンポール・サルトルが、「飢えて死ぬ子供の前で、自分の作品(「嘔吐」)は無力である」と言いました。それと似たような状況が震災後の陸前高田では随分あって、だからアーティストが来て途方に暮れるのも当然のことだと思います。ただ最近、あれから時間が経って、物の見方も少しずつ変化して行って、大変だった過去のさまざま、生きていく上での、なにかがしかの味わいになってきて

いる、ということも感じています。もちろん津波は不幸以外の何物でもないし、残された人々の不幸のどこが変わったかという、それほど変わってはいない。でも、目の前のことだけじゃなくて、ちょっと先のことを考えながら1日を送って振り返る。その繰り返しの中から、時間をかけて感得されるものがある、ネガをプリントして並べてみると、何かこう、これが生きていることなんだなって思う。それは楽しい感覚でも幸せな感覚でもないのだけど、何か「必要だ」と思えるようなことなんです。だから、たとえば目の前の飢えた子供に文学が役に立たないとしても、その子がもし助かったら、10年、20年経って落ち着いた時に「文学があつて良かった」と思うかもしれない。まるで患者に薬でも与えるように、緊急にアートのことを考えるのではなく、ある時間の幅の中を僕たちの身体が船みたいに運ばれていくような感覚を持つと、もう少しリラックスした雰囲気が生じて、制作への確信も芽生えてくるんじゃないかな。この場にはコーディネートやプロデュースを志している方が多いですから、どうかそのことは心に留めておいてもらいたいと思います」。(畠山直哉氏)



AIR CAMP 2017 を終えて

飯島早矢加(学生/東京都)

陸前高田に来たのは4回目でしたが、アートを通して陸前高田を感じたのは初めてでした。最後のまとめで、私は「言葉」「伝統」の2つをキーワードにしました。私は小さい頃から書道をやっている、書は言葉選びから始まると考えています。そのため、生活の中で「言葉」をとても大切にしています。3日間、陸前高田で過ごす中ですっと入ってきた言葉が、鹿踊の歌詞でした。上手く言葉が聞き取れなかったからこそ、誰が作った歌詞なんだろう、どんな伝統のもとに生まれたんだろうと気になりました。私は鹿踊の歌詞を書き書いてみたい、もっと知りたいと思いました。この新たなアイデアは、今後大きく生きてくると感じています。

川上りえ(アーティスト/北海道当別市)

ウバトサットさんのコミュニティ(集団)としてのアート展開や、ヌル・アクバルさんのパイオ・テクノロジーを取り込んだプロジェクトから、今日のAIRの多様性を実感しました。ショーネッドさんからは、陸前高田に長く滞在して築いたコミュニティとの関係だけではなく、彼女が鹿踊を介して生み出したことについて詳しく聞きたかったです。杉原さんの「原始感覚」という表現はすごく腑に落ちたし、身体とその場の環境から生み出す表現には、生きる力に直結するエネルギーに満ちた本能的な感覚として魅力

を感じました。作家として創造することの意義を常に考えている身としては、畠山さんの考え方から学ぶものが多かったです。事前資料の中で、「アートは問うものというより、むしろ答えである」とおっしゃっていたのが印象深いです。ただ、答えを出すために問いから始めることには違いがないので、問いから答えに至るプロセスについて、自分自身、より考えを深める必要性を感じました。

木田祐揮(学生/北海道岩見沢市)

私はこれまでAIRというものにぼんやりとしたイメージしか抱いていなかったが、アーティストが滞在を通して自分が今まで見ていなかったものや感じたことのないものを知り、新たな作品を生み出すことが、AIRの持つ大きな意味だとわかった。そして、陸前高田という土地で3日間過ごしたことで、土地の持つ力や魅力を実感することができた。参加者や講師の方たちとお話して、表現することの面白さを改めて感じ、「場」の持つ力を再認識できた。このことは自分自身にとって大切なことで、これからの活動に活かしていきたいと思う。

高尾広通(大学教員/北海道札幌市)

合宿形式の研修は有効と感じました。理由は大きな「転地効果」。人間は日常に居続けすぎるとケガレで重くなる。軽さを失うことは自由を失うこと。改めてそのことに気づかせてくれました。もうひとつは「異(業)種”交流力」。「異(業)種」は「まれびとたち」あるいは「異界人たち」と言ってもいい。転地合宿は、閉じていたものがぱっと開く。受講生の一人から「地域づくり協力隊の進化系」という先進モデルが近隣の遠野市に

生まれていると聞き、大きく心が動きました。10月に現地を訪ね、レポートにまとめようと考えています。

今川和佳子(アートコーディネーター/青森県八戸市)
涙が自然と出るほど感動と発見の多い2日間でした。各講師のプレゼンテーションも刺激的でしたが、それ以外の時間の皆さんとの会話がとても有意義でした。スタッフの方は準備も大変だったと思いますが、運営そのものも傍で拝見していて勉強になりました。また、被災地としての陸前高田の真の姿、その一端を知ることができたことも、本当にありがたい体験でした。同じ東北で起こった出来事、佐藤たね屋さんとリアスアーク美術館でのお話を、多くの人に知ってほしいと思いました。今後はレジデンスをやることそのものが目的となるのではなく、レジデンスが媒介となって、地域の課題や可能性に直接働きかけられるようにしたいです。具体的には、高齢化が進む八戸の集落における空き家の活用や人材の交流、居場所づくりなど。10年後どうあるべきかのビジョンを描くことなど、自分がいまやるべきことは何なのか考えさせられました。

新宮海生(学生/北海道岩見沢市)

大学では、主に制作を行う美術文化専攻とは線引きされる「芸術・スポーツビジネス専攻」として、アートマネジメントについて学んでいます。その中では、必然的に「地域」「町の活性」「集客」などがキーワードとなってきます。これまでは、それらをふまえて企画や実践など、さまざまな場面でやりたいことを考えてきました。しかし、それらに違和感を覚えていたことが、今

回のAIR CAMPでスッキリしたように感じます。地域活性化や収益を求めることを否定しているわけではなく、自分の中で、マネジメントではなく「表現したい」という気持ちが強くなったことに気がきました。これは、アーティストによるレクチャーだけではなく、陸前高田の人々や町、また多くの時間を共有する合宿という形から得られたことです。残りの大学生活の中で、「面白い」「やりたい」という気持ちを素直に受け入れ、軽やかに行動していこうと強く感じました。

利根川兼一(合同会社くらし工房つむぐ屋/埼玉県さいたま市)

合宿形式だったので、夜や食事の時間、空いた時間に講師の方や参加者とコミュニケーションが取れて良かったです。できれば実際の運営資金の調達や運営する上での項目なども知りたかったのですが、運営の形態のヒントはもらえたので、今後活用したいです。今まで自分が身を置いていた世界とは違うところに参加して、いろいろなアイデアの種がいくつも生まれるのを感じる感覚がありました。自分が漠然と「したいな〜」と思っていたことをすでに行っていた方もいたりして、今後の自分の舵取りに大いに影響を受けました。

蟻川小百合(芸術祭スタッフ/新潟県新潟市)

初めて被災地を訪れました。私自身は、生活の中で「自分も地域の当事者だ」という意識がないわけでもないのですが、そういう実感は今のところほとんどありません。きっと震災のような大きなことが起きて、初めて気づかされるのかもしれませんが、でも、何かが起きてからで



はなく、皆が地域の当事者として参加できる場だったり、話せるような場だったり、やはり必要だと思いました。私は自治体など行政との仕事をすることが多く、文化や芸術の取り組みに社会的な成果が求められることを、最近特に強く感じるようになりました。成果への意識が高まる一方で、遠回りが許容されない状況下ではどうしてもプロセスが削ぎ落とされて、結果的にその扱ひの重さに圧倒的な差が生じてしまっているように見えることも多いです。一年先の成果と言っても、そんなに多くは積み上げられない時間です。AIR CAMPで陸前高田を訪れたことで、文化や地域について考えるということは、一年とかそういう単位ではないなと思知らされると同時に、そういうつもりでやっていこうという気持ちになりました。

遠藤初穂(学生/東京都)

最終日のまとめで自分が出したキーワードは、価値の変化、記憶、社会貢献でした。震災時は中学二年生で、映像、新聞で見るものに対して現実感がなく、岩手や東北は「被災地」という捉え方でした。でも、陸前高田に来ることで、「別の出来事があった場所」というように捉え方が変わりました。何をミッションとしてAIRを行うかは大切なことで、社会貢献を求めるAIRになるのかもしれないし、そうではなくアーティストの隠れ家として、アーティストによって対応を変化させるアメーバ的な場所として存在することになるのかもしれない。また、AIRは、知らず知らずのうちに異文化を受け入れるための装置になっていて、アーティストという不思議な職業をリスペクトできる場所でもあるのだと思いました。同時に、さまざまなAIR団体に同じ内容を問いかけてみたら、どのような答えになるのだろうと思いました。あの場で挙げられたキーワードを紐解き、ここから自分なりに掘り下げたいと考えています。

富川岳(プロデューサー/岩手県遠野市)

アーティストを招くということ自体のニュアンス、大事にするポイント、肌感や、地域でどのようにアーティストと交流し、彼らと協力しながら動いていこうというイメ

ジを得ることができました。アートというほぼ未知の領域に飛び込んだことで、いろいろなお話を聞くことができ、これから遠野でアーティストを招いて活動するイメージが湧きました。合宿形式ということで何気ない空き時間の会話などで面白い話が聞けたり、参加者同士の交流を深めることができましたが、全体的に座学のボリュームが多かったのもう少しアウトプットする時間が多い方が学びになるかもしれないと思いました。東北開催ということで、八戸や陸前高田などの方々と交流できたのがすごく嬉しかったです。

澤野唯(会社員/神奈川県川崎市)

さまざまな立場の方からまちづくりや芸術に関する想い、目指しているものについてお聞きできたことは、本当に貴重な機会でした。また、震災地域に住む方々とのふれあいによって、アートと社会を結びつけることの意義やコミュニティに入り込む難しさ、重要性を実感でき、改めて陸前高田での開催の機会に参加できたことに感謝します。今回つながりをもてた皆様の活動に刺激を受けながら、自身の活動にも活かしていきたいと思います。

山本 謙一(一般社団法人AURA総研 代表理事/北海道札幌市)

研修地域の特性を十分生かし、それで終わらない普遍的テーマを外国講師やレクチャーを通じグローバルに検討できた。特にASEAN諸国の講師を招へいたことで、世界でも特に注目されているジャンルのソーシャル・エンゲージド・アートの最新動向に触れることができた。



PICK UP

田名遼元
国際芸術センター青森・テクニカルスタッフ/青森県青森市

AIR CAMPに来る前は、他のAIRやボランティア組織の運営実態について、知ることができれば良いなと考えていました。しかし、終盤になると、それらはあまり必要のない課題となっていました。スペインにお礼の手紙を書こうと決め、スペイン語で想いを伝えた佐藤さんの言葉と、震災後の想いを描いた絵。伝承館の武蔵さんのお話と歌。柗内沢鹿踊の舞。地元復興のために無償で働き続けた菅原さんの想い。リアス・アーク美術館の山内さんの眼差し。鶴亀鮎さんの振る舞い。そして畠山直哉さんの作品と言葉。震災を経験し、悲しみを経験し、苦しみを体験し、絶望を経験してきた人たちの、その肉体から外に表れ出てきたものに心揺さぶられるエネルギーを感じました。肉体の根幹や脳内の神経に、“あの時”の経験が強い変化のきっかけを与えたように感じました。

現代人は本当にものを作らないし、作れないと思いついています。教育やメディア、社会など、私たちが取り巻くいろいろなものが、人間本来の能力や魅力を萎えさせていると感じます。私が動いている国際芸術センター青森でも、年に一度、市所蔵作品展として県内の民具や衣類、道具などを現代風なインスタレーションにして展示しています。しかし、それらは自分の祖父や祖母の時代に、誰もが当たり前で作ってきたも

のです。食べもの、着るもの、使うもの、住むところ。本来は誰もが自分で作れるし、誰もがその創造を楽しんでいたのではないかと考えます。それに比べ現代人は、ただ鑑賞し、なるほどと頷き、珍しいと崇めているだけのように見えてしまう時があります。それが現代のアートであるならば、実に陳腐であり、愚かではないかと感じる時もあります。

普段アートと呼ばれる世界で働いていると、いろいろな問題に直面します。皆、それぞれ多種多様な認識と目的をアートに持っています。恐らくアートの定義と共通理解は、永遠になされないのではないかと。答えの出ない問いと毎日向き合っています。“アート”は“人間的行為”であると聞いたことがあります。そして、海や山と向き合い、食べものを作り、着るものを作り、道具を作り、住まいを作り、“生活”というものをつくる行為、それもまた“人間的行為”であると思えます。あらゆるものが流され、あらゆるものが破壊され、あらゆるものを失った陸前高田の町。その町は今、生活のために創造を続けています。人と人が向き合い、次なるものを創造していく“人間的行為”が“生活”を“創造”していくのだらうと発見し、感じたAIR CAMPでした。



S-AIR / AIR CAMP 2017

日沼 慎子
女子美術大学准教授・陸前高田AIRプログラムディレクター

この度、日本のAIRの黎明期から現在まで、長く豊かな経験を持つS-AIRとの協働にて「AIR CAMP 2017」を実施することができたことは大変感慨深く、このような機会をいただいたことに深く感謝をしている。S-AIR代表の柴田氏と私は、日本のアーティストおよびAIR団体をネットワークし、相互の情報や経験をシェアし、各地のAIRの活動がより豊かに発展するための活動を20年来、共に行ってきた同士である。柴田氏と打ち合わせをしている中で決定された今回のテーマ「生活と創造」は、まさに、これからのまちの再興にあたって最も大切にすべきものであり、AIRにとっても重要なテーマである。さらにいえば、「生活と創造」とは、現代に生きる私たちのすべてが自らの手に取り戻すべきものでもあるのだと。

2013年から開始した「陸前高田AIRプログラム」は、毎年の試行錯誤を繰り返しながら5年目を迎えた。これまでを振り返ると、災害後、これまでの日常に戻るために、それぞれに大変な状況下において日々生活されている方々の中に、海外から訪れたアーティストが入り込むことで考えられる数々の心配は、実のところ、いつも杞憂であった。異なる言語の、しかしながら、好奇心に満ち溢れるアーティストたちを、人々はいつも大きな心で受け入れて下さった。仮設の店舗や自宅に招き入れ、

語り合い、食事をし、お酒を酌み交わし、共に踊り歌った。アーティストたちは、人々の心に寄り添うように、時には抗し難い好奇心に動かされながら、写真、映像、ダンスというそれぞれの表現によって、陸前高田の風景、そして風景とともにある人々の記憶を記録し、紡ぐことで、人々と共有してきたのであった。こうして5年間に会った人々に等しく横たわっているものこそ、このAIR CAMPのテーマ「生活と創造」なのである。生死を分つその時を乗り越え、大切な人々の死を乗り越え、自らの力で生きていくための術こそ、イメージーションと技術の融合、まさしく創造的な行為であり、人間の根源的な力であり、私たち人間が如何に生きるべきかという、大きな問いを強く投げかけられるものであった。

AIR CAMPの最後に行った参加者とのディスカッションの場からは、「現代人は本当にものを作らないし、作れないと思いついでいる。そのことが、人間本来の能力や魅力を萎えさせていると感じている」というコメントがあった。こうした気付きについて、この陸前高田で共に考え、議論できたことはとても大切な経験であった。人間にとって生活と創造とが不可分な関係であり、不可欠なものであることを改めて実感し、参加者それぞれの現場に持ち帰り、次なるアクションへとつなげていただきたいと願う。



S-AIR / AIR CAMP 2017

Teiko Hinuma
Associate Professor at Joshibi University of Art and Design,
Program Director at Rikuzentakata AIR

また、写真家の畠山直哉氏との対話を実現したことは、大変意義深いものだった。写真家という冷徹で孤独な観察者としての、対象への深い洞察と批判、そして共感。ファインダー越しに一瞬を切り取るという決断の連続の中にあっても、隠しきれず立ち現れてしまう美の存在。幾重にも呼び戻される記憶、心の揺れ、情緒。創造と美をめぐる深い考察から紡がれる言葉のひとつひとつが、深く心に残っている。アーティストの創造的プロセスへのサポートのあり方を考えるときに忘れてはならない大切な示唆として、畠山氏の態度、美に対する意識を、私たちは繰り返し思い出すことになるであろう。

最後に、この報告書の中に記しておきたいことがある。日本のAIRの先駆者であり、ネットワーキングの重要性を提唱し続けてきた門田けい子氏が、2017年1月10日に他界された。私にとって、AIRのいろはを教えた下った師であった。門田氏は90年代後半より、水彩多色摺り木版画の研修プログラムを立ち上げ、日本独自の版画技法を現代アーティストが学びハイブリッドな表現へと昇華させるための支援を行うのみならず、木版画を支える技術者、職人の技の継承をも標榜し、伝統と現代をつなぐイノベーションともいえるべき、世界に誇る優れたAIRプログラムを運営されてきた。さらに、日本におけるAIR担当者の研究会を組織し、国内外のネットワーキング促進、AIRの課題共有とプレゼンス向上にご尽力された。門田氏の存在がなければ、今日の日本のAIRの多様化、発展はなく、このAIR CAMPのアイデアや組織間が連携してプログラムの実現はなかったと言っても過言ではない。「小さな幸せを、大きな幸せに」と言い続け、AIRのネットワーキングを牽引し次世代の育成を遂げられた門田氏に、心から哀悼と感謝の意を表したい。

First of all, I would like to show my gratitude for having the opportunity to organize “AIR CAMP 2017” together with S-AIR, whose long-term & rich experience in Artist-in-Residence organization reaches back to the dawn of residencies in Japan. Shibata, the director of S-AIR and I have been partners for over 20 years to support Japanese residency organizations toward their development of a fertile future. Such work includes networking, sharing experiences and circulating information between Japanese artists and residency organizations. During meetings with Shibata, we came up with the theme of AIR CAMP 2017 as “Everyday life & Creation” which is, exactly, the most critical matter for the revitalization of the city of Rikuzentakata, Iwate prefecture, and its residency. Furthermore today, it is crucial for individuals to reclaim “Everyday life & Creation” back into their own control.

Currently, Rikuzentakata AIR entered its 5th year by overcoming repeated trials and errors each year since 2013. Looking back on our program, after the 2011 Tōhoku earthquake and tsunami disaster, artists from overseas visited to work on their projects while residents of Rikuzentakata have had their own struggle to regain a semblance of normality in everyday life. In the encounter between two such distinct parties, endless concerns could be imagined. However, it was a needless fear, as local residents always welcomed artists with great sympathy. They invited artists, who were non-Japanese speakers but full of curiosity, to their temporary houses and stores, had conversations over dinner, got drunk, danced and sang together.

Artists who were planting themselves in the lives of residents and willing these lives to be their own, occasionally pushed by their irresistible curiosity, recorded the landscape of Rikuzentakata, as well as these peoples' memories of the landscape. In actualizing them as artistic practices with the general public, the artists put the memories in motion like spinning yarns, bringing their strands together through their own media of photography, video and dance performances. In reality, these mutually shared artifacts which underlay the encounters between people we met in past 5 years constitute

“Everyday life & Creation,” the theme of AIR CAMP. It certainly shows the potential harmony of imagination and technology and, without doubt, makes up creative action, and is the fundamental power of human beings, meaning the art of survival. People who overcome the moment that differentiates life and death and overcome the passing of close people, know this achievement. At the same time, the art of survival is the fundamental question about how to live in this world.

A significant comment was pronounced by the end of discussions during AIR CAMP, “Nowadays, neither do people create things, nor do they believe they are capable of doing so. Indeed, this assumption controls natural talent and the attraction to creativity”. Everyday life and creation are inseparable and essential for our lives. It was a valuable experience to think and discuss this awareness in Rikuzentakata. I hope that each participant brings back their experiences from AIR CAMP to expand their next actions.

In addition, a dialogue with photographer Naoya Hatakeyama was remarkable. I am deeply impressed with every single, uninflected word from his deep consideration about the relation between creation and aesthetics; recalling frequent memories, vacillation, emotion. And particularly, the existence of the aesthetic dimension that appears no matter what in the flow of capturing the moment through the finder. As a photographer, a realistic and solitary observer, he has deep insights, criticism and sympathy to the object. Residency organizers will remind themselves that his attitude and conscientiousness toward aesthetics are an important urge when we contemplate supporting the creative process of artists.

Finally, I would like to conclude by mentioning Keiko Kadota who passed away January 10th, 2017. She was a pioneer of Japanese residencies and had proposed the importance of networking among peers. Also, she was my mentor and taught me the ABC's of residencies. In the late 90s, Kadota established a research program to improve the expertise of mokuhanga (water-based woodblock printmaking) professionals and to support world wide contemporary artists to redirect mokuhanga to hybrid expressions from traditional Japanese printmaking. In addition, she had organized a residency specialised in mokuhanga, representing a form of Japanese art practice to the world. an innovative program connecting tradition and the present by advocating the succession of skills and techniques of craftsman who have maintained the mokuhanga until now.

Furthermore, Kadota devoted herself to running a residency program: she set up study groups, built a network amongst Japanese and International residency organizations, helped improve the communication between organizations, as well as promoted the importance of residency programs to the general public. Needless to say, without Kadota, there would neither be development nor diversity in Japanese residencies, and certainly there would not be projects or partnerships amongst organisations including this AIR CAMP. She led the network of residency organisations and nurtured the next generations as she always said, “Make small happiness a greater happiness”.

Finally, I would like to conclude with my condolences and gratitude to Keiko Kadota.

Rikuzentakata - Ondo Song Words

1. Spring – Haru

Waves of the sea sing along with the seagulls “sate”
Even Tsubaki Island melts away into the mist
Boats leave the shore to return again, let's dance,
It's really spring in Rikuzentakata,
The view is like a drawing with flowers,
come let's get together again,
Let's enjoy the beautiful places in Rikuzentakata.

2. Summer – Natsu

It's a fire in a camp if you walk to Matsubara
(70,000 pine tree forest)
A fresh fire is burning strongly,
A twig of the pine tree is welcoming you
Really summer in Rikuzentakata
Even you can welcome back your old memories

3. Autumn – Aki

Rich rice fields a golden treasure
Reflected in the flowing river like a rainbow
Each rice plant, dance in the wind,
Shining and wet from the rain, so fresh.
Really autumn in Rikuzentakata,
Even the moon is smiling like it's dreaming

4. Winter – Fuyu

Piled up snow melted away with emotions
From the top of Hikami Mountain to Takekoma
The wind is blowing without feeling cold
Really winter in Rikuzentakata
It's a paradise where you can forget this world.

アーティスト・イン・レジデンス事業 人材育成キャンプ&フォーラム アジア
AIR CAMP 2017 in 陸前高田「生活と創造」

主催 特定非営利活動法人S-AIR
助成 文化庁 平成29年度 アーティスト・イン・レジデンス活動支援を通じた国際文化交流促進事業
国際交流基金アジアセンター
企画協力 なつかしい未来創造株式会社(陸前高田アーティスト・イン・レジデンス プログラム)
協力 AIR NETWORK JAPAN
通訳 橘匡子、ルラク・ド・ロシュブルヌ・マリー、西村翠

npo S-AIR



記録集編集 松田仁央 デザイン 小川陽
翻訳 植村絵美、マツ・ウェブ 印刷 札幌大同印刷株式会社
写真 S-AIR、松山隼 https://www.dioce.co.jp/daido/

特定非営利活動法人S-AIR
〒060-0032 札幌市中央区北2条東15丁目26-28 なえぼのアートスタジオ / naebono内2F
TEL 011-299-1883 http://www.s-air.org/ E-mail: info@s-air.org

2018年3月発行

